

プロフィール

たかおか・すえお

1951年生まれ。滋賀県近江八幡市在住。ウキフカセ釣りに魅了されて31年目。好きなフィールドは若狭湾と瀬戸内海。大チヌを求めて長崎県五島列島へ遠征もする。クロダイ・チヌ以外にグレとアユも得意。MAXフィッシングチーム会長。

力強いブラックシルバーのボディと精悍な顔つきのクロダイ・チヌ。何回キャッチしてもうれしいものです。



はじめてのクロダイ・チヌ釣り

スタイル 1

高岡末男の ウキフカセ 釣り入門

最もポピュラーな狙い方が「ウキフカセ釣り」です。マキエを撒いて食い気をおおき、そのマキエが効いている範囲に仕掛けを流し、付けエサを食わせます。海面に漂うウキが消えたときから、バワフルな攻防がはじまります。

レクチャー

① ウキフカセ釣りとは？

居場所を割り出し

マキエの中に付けエサを流す

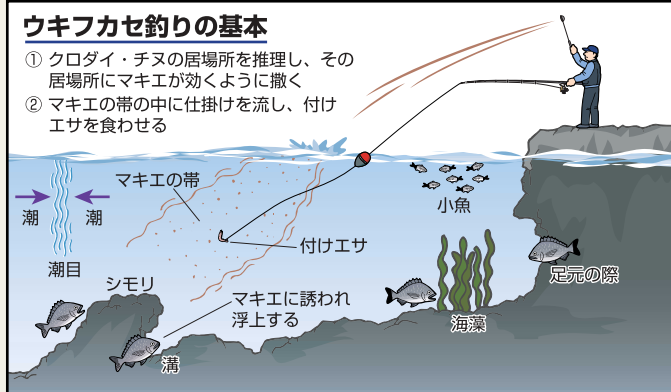
ウキフカセ釣りは、クロダイ・チヌの居場所（ポイント）を推理し、そのポイントにマキエが効くように撒いて食い気をおおき、そのマキエの中に仕掛けを流し、付けエサを食わせる攻め方です。クロダイ・チヌのポイントとは、

足元の際や海藻の周り、海底が変化するシモリや溝、マキエが溜まる潮と潮がぶつかる潮目などです。こんな身を潜められる場所をクロダイ・チヌは好みます。主なフィールドは磯と堤防です。陸から離れた磯や堤防で狙う場合は渡船を利用して渡ります。

まず、マキエをポイントに効くように撒きます。マキエはゆっくりと沈下していきます。それをできる限り目で追いかけて、その中に付けエサを流し込みます。マキエの沈下状態を見ていると潮の流れの速さや方向も分かり、その流れて行く方向にポイントがあれば

ウキフカセ釣りの基本

- ① クロダイ・チヌの居場所を推理し、その居場所にマキエが効くように撒く
- ② マキエの帯の中に仕掛けを流し、付けエサを食わせる



トです。当然、付けエサもポイントに届くように、竿を微妙に操作し、ラインをうまく操作してマキエの中に流し込みます。このときの付けエサの状態、つまり海中に流れている仕掛けの行方を伝えてくれるのがウキです。そして、このウキが海中に消し込まれたときがクライマックスです。竿をおおきフッキングします。

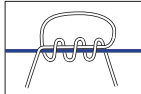
マキエで誘い出し 繊細な仕掛けで攻めまくる エキサイトゲーム



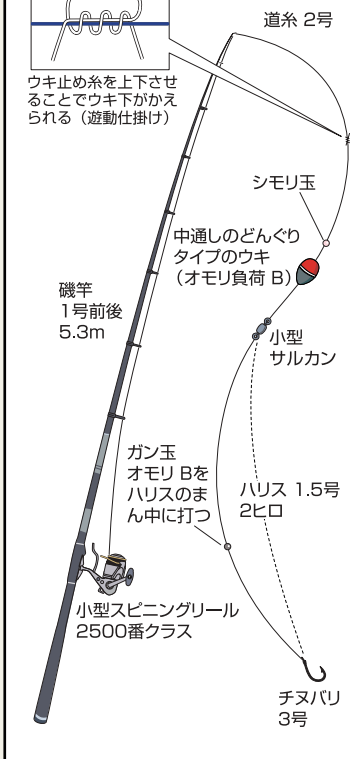
ヒット! この竿の曲りがたまりません。手元にグイグイと野生のパワーが伝わってきます。安全面を考えてライフジャケットは必ず着用しましょう。「スーパーメッシュライフジャケット」なら通気性が高いため、より快適に釣りが楽しめます。

基本タックル&仕掛け

▼ウキ止め糸の結び方



ウキ止め糸を上下させることでウキ下かえられる(遊動仕掛け)



ウキは、ほとんどのフィールドに対応できるガイドが外に付いたアウトガイドの磯竿1号前後の5.3mがいいでしょう。リールは2500番クラスのスピニングリールが使いやすいでしょう。リールにはレバーブレーキ付きとドラゲ付きがあり、レバーブレーキ付きは、自分でレバーの操作で道糸を出したり止めたりでき、大物がヒットして道糸が切れる限界になるとレバーを緩めて道糸を出して対処できるという長所があります。

仕掛けは、ウキ下をこまめに調整できる遊動仕掛けが一般的です。ウキ下とはウキから付けエサの間隔のことです。このウキ下を長くすれば深い場所を狙え、短くすれば浅い場所を狙えます。つまり遊動仕掛けはクロダイ・チヌの居場所の水深に合わせてより正確に付けエサを流し込めるというものです。ウキ下の調整はウキの上にセットしたウキ止め糸でします。

ウキは、道糸がボディーの中を通る中通しタイプや、ウキの下部に環という道糸が通る金具が付いた環付きタイプ、立ちウキなどがあります。それぞれ一長一短があり悩むところですが、まずは操作がしやすい中通しタイプから使ってみてください。なお、ウキにはそれぞれオモリ負荷が表示されているので、それを基準にオモリを打ちましょう。

レクチャー

②

タックル&仕掛け

磯竿1号クラス ウキ下調整できる遊動仕掛け

ウキは、ほとんどのフィールドに対応できるガイドが外に付いたアウトガイドの磯竿1号前後の5.3mがいいでしょう。リールは2500番クラスのスピニングリールが使いやすいでしょう。リールにはレバーブレーキ付きとドラゲ付きがあり、レバーブレーキ付きは、自分でレバーの操作で道糸を出したり止めたりでき、大物がヒットして道糸が切れる限界になるとレバーを緩めて道糸を出して対処できるという長所があります。

③ マキエを作ろう

マキエはブレンドが基本 オキアミ+2種類の配合エサ

ウキフカセ釣りにとってマキエは必要不可欠です。マキエには食い気をおおる集魚効果、付けエサをうまくカモフラージュする濁りと拡散性、思ったところに撒ける操作性などが要求されます。これらを満たすために高岡さんはマキエをブレンドします。

まず、生のオキアミ6kgを解凍し粗めにつぶします。そこへ配合エサの「チヌパワーG2」と「チヌパワームギ」をそれぞれ八分目入れ、エサの袋についている水量線を参考にして適量の海水をく



▲ 配合エサのブレンド例
左から「チヌパワーG2」、「チヌパワームギ」、「チヌ増」

わえて、ベタ

つかない程度に混ぜ合わせ

ます。海水を

入れすぎて

しまった場合

は、残っている

配合エサ

で調整しま

す。「チヌパ

ワーG2」は着水後にゆつくりと

拡散沈下するのでカモフラージュ

性が高く、「チヌパワームギ」は

集魚性がよくネバリがつくので

マキエを固め遠投が効きます。こ

の2タイプを混ぜることで理想の

マキエに近づくといいわけです。

マキエが4倍に増えるという

「チヌ増」は緊急用として常備し

ています。マキエが足らなくなっ

たときや雨や海水をかぶってベタ

つき過ぎたときに入れると効果

絶大です。



生のオキアミがベースになります。一枚が約3kgで半日の釣りなら二枚の約6kgを使います。あと一枚は予備のマキエ。



ヒシヤクを使って思い通りにマキエが撒けるコントロールを身につけましょう。遠投はグッとマキエをカップの中でまとめて撒きます。また、カップを横に切るようにして撒けば広範囲にマキエがバラけます。

④ 付けエサの使い分けとハリへの付け方

よく使われるオキアミ エサ取りに強い「くわせエサ」

最もよく使われる付けエサは生のオキアミです。ところが四季を追いかけるウキフカセ釣りはいつも同じ状況で竿が出せません。特に水温が高くなる季節にはエサ取りと呼ばれる小魚たちが増えて付けエサをつつきまわり、オキアミでは釣りにならないこともしばしばです。地球温暖化が影響しているのか近頃ではエサ取りがはびこる時期が長くなったようです。

そんなエサ取り対策に必要なのが、オキアミよりエサ持ちがいい加工した「くわせエサ」です。その「くわせエサ」で

もエサ取りに強い段階があり3種類は用意していた方が安心です。

このコーナーの取材時も、この順番に付けエサをローテーションして仕留められました。まさしくエサ取りに強い付けエサでした。

左の写真の「くわせオキアミスーパーハード」は生のオキアミでは歯が立たないとき



▲「くわせエサ」は3種類を用意したい
左から「魚玉」、「くわせ練りエサ・チヌ」、「くわせオキアミスーパーハード」。

オキアミは尾ハネをとり、ハリ先を殻側から刺す「通し刺し」にします。



高岡流練りエサ使い

しっとりやわらかく食い込みのいい「魚玉」、ニンニクとアミエビを配合したクロダイ・チヌ専用の「くわせ練りエサ・チヌ」は単体でも安心して付けエサとして使えますが、高岡さんは2タイプをミックスすることでネバリ具合をより微妙に調整しています。



① 小粒状になった「魚玉」と板状になった「くわせ練りエサ・チヌ」を同量混ぜます。



② しつかり力を入れて混ぜ合わせます。練れば練るほどエサ持ちがよくなります。



③ 完成。練りエサは時間が経つと固くなるので小出しにして使います。



④ 直径1〜1.5cmの大きさに丸めてハリに刺し再度固めます。

マキエの作り方

マキエはしっかりとムラなく混ぜ合わせる

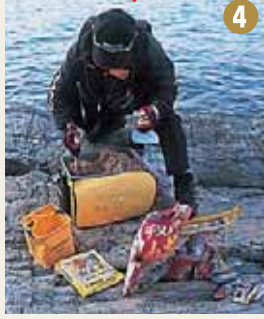
1 バツカンの中で解凍した生のオキアミ約6kgを粗めにつぶします。ある程度つぶさないとうまとまりがよくありません。

2 「チヌパウダー」を袋の約八分目入れます。少し残しておくのは後で足して微調整できるからです。



3 次に「チヌパウダー」を同じく袋の約八分目入れます。これも残りの二分目はおいておきます。

4 生のオキアミと配合エサをしっかりとまんべなく混ぜ合わせます。



5 バツケージに記載されている水量を参考に、海水を入れてネバりを出しとまりやすくします。水分が多いと遠投がしにくくなります。

6 マキエの完成。はじめは固めにつくり、時間が経過するとオキアミから水分が出るからです。



レクチャー

5 攻め方の基本

ウキ下をかってタナを探り 居場所に付けエサを流し込む

まずクロダイ・チヌが好む居場所を偏光グラス越しに推理するか、慣れた人や船長に教えてもらいます。居場所は左の写真のような海底に変化のあるところです。

次にマキエをその居場所に効くように撒きます。そして付けエサをそのマキエと同調させながら流し込みます。こ

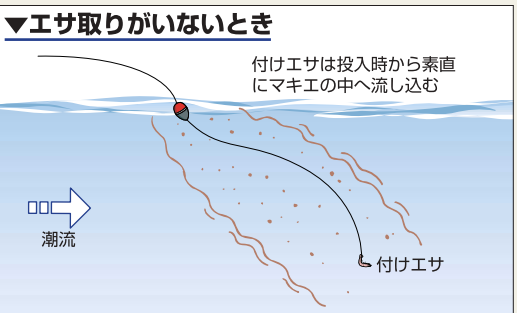
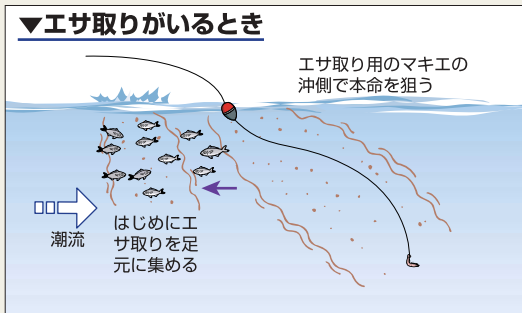


こで大事なことはウキ下の調整です。偏光グラスで海底の様子が推測できる場合はウキ下の基準は3〜4ヒロ(4.5mから6m)ということが多いようです。これで流し込んで付けエサが残ってくるのならさらにウキ下を深くし、付けエサが取られるようなら浅くしていきます。これの繰り返しでクロダイ・チヌのタナを探っていきます。

もしマキエにエサ取りが群がるようなら、下のイラストのように足元にエサ取りを足止めするようにマキエを撒き、エサ取りをかわして少し沖側で本命を食わせるように攻めます。



沈下していくマキエ。この煙幕の中に付けエサを忍ばせ攻めていきます。



1ヒロ=約1.5m

⑥ アタリ→アワセ→やり取り→取り込み

遅いアワセが確実
竿の胴で抵抗を受け止める

ウキにモゾモゾと前ブレがあり海中に引き込まれたらアタリです。しかし、ここですぐに竿をあおりフッキングすると、まだ充分に付けエサを口にしていないので、ハリが外れるケースが多くなります。合わせるタイミングはウキが見えなくなつてからでも遅くはありません。

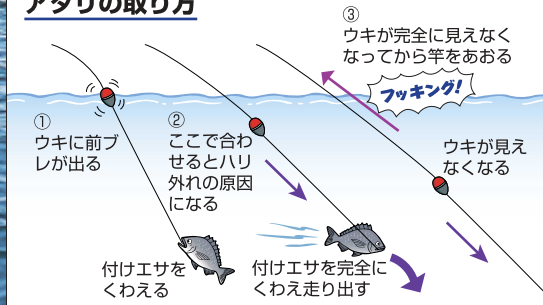
ん。むしろその方が確実です。

フッキングすると竿にクロダイ・チヌの抵抗がグングンと伝わってきます。その抵抗を竿の胴の部分で受けとめるような感じで引き寄せてきます。後はタモに入れるだけでOKです。

ウキにアタリがあり一呼吸おいてフッキング! よし、アワセが決まりました。竿にクロダイ・チヌのパワーが伝わってきます。さあ、攻防のはじまりです!



アタリの取り方



アワセ

やり取り

取り込む



グイグイと力強い抵抗を見せますが、そのパワーを竿の胴の部分で受け止めるようにして引き寄せてきます。焦らずにじっくりと浮かせることがコツ。浮いてきたらタモの柄を伸ばしてすくいます。すくうときは追い回さず魚体の下にタモを入れ、その中に落とし込むような感じにします。

キャンチたら竿を股に挟み込み、両手でタモの柄を締めていきます。これでフィッシュユ。タモ入れは一人でこなすとかっこいいのですが慣れるまでは仲間にお願ひした方が安全です。